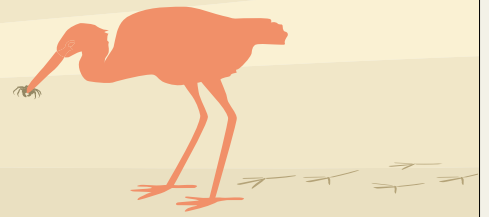


なぎさ NEWS



トビハゼは干潟であればどこでもくらせるの？



泥っぽい干潟に巣穴を掘るトビハゼ

水族園が2003年からトビハゼ調査を行っている葛西海浜公園「東なぎさ」。トビハゼがくらす泥干潟は「東なぎさ」の中央にあり、その面積はほんのわずかです。泥は砂と比べ粒子が細かいため、波の影響が少ない場所に堆積します。「東なぎさ」は南側（沖側）に開けているので波の影響を受けやすく、その大半は砂っぽい干潟です。しかし、中央部には楕円形の小島のような場所（幅約120 m×奥行き約30 m）があり、これにより沖からの波が遮断され、そのためか北側に泥が堆積し泥干潟をつくっているようです。そこにトビハゼがくらすしているのです。毎年夏に行う巣穴調査から、この泥干潟でも巣穴の分布は一樣ではなく、泥干潟中央付近よりは端のほう、とくにアシ原と隣りあうところに多く分布する傾向があります。興味深いことに、以前は泥干潟とアシ原ははなれていましたが、アシ原が拡大し泥干潟と接するようになり、この部分にトビハゼとその巣穴が見られる頻度が高くなったのです。トビハゼにとってアシ原は、満潮時に茎につかまり次の干潮を待つ場所として、さらには鳥などの敵から身を隠す場所として重要なのでしょう。「東なぎさ」のなかでも泥干潟はほんのわずかで、そのなかでもトビハゼが好む場所は限られているようです。干潟であれば、どこでもトビハゼがくらせるわけではないのです。

（飼育展示係 田辺 信吾）

海水浴だけじゃない！「西なぎさ」の楽しみ方

水族園の目の前にある干潟、「西なぎさ」が、今年の夏、大きなニュースになりました。夏休み中、社会実験として海水浴ができるようになったのです。ニュースの影響か、週末には多くの人々が「西なぎさ」に訪れていました。でも「西なぎさ」には、海水浴とは違う、水族園おすすめの楽しみ方があります。

葛西臨海公園から橋を渡ってすぐに行ける「西なぎさ」は、都会のなかにあって、多様な生き物に出会える貴重な場所です。かつて東京湾には広大な干潟がありましたが、そのほとんどが埋め立てられました。実は、「西なぎさ」は、それら失われた干潟の代替としてつくられた人工干潟なのです。私たちも定期的な生き物調査や観察会などの教育普及活動を頻繁に行っています。潮が引くと、今まで海の底だった場所が、歩いて探検できる砂と泥の陸地になり、巣穴の中に隠れていたコマツギガニやオサガニが活動を始めます。他にも、二枚貝やゴカイのなかまなど、地面に穴を掘ってくらしている生き物がたくさんいるので、あやしい穴を見つけたら掘り返してみましょ。海水浴ができない干潮時が、生き物探しの一番おもしろい時間です。「西なぎさ」に来たら、ぜひ生き物探しをしてみてくださいね。

（教育普及係 宮崎 寧子）



にぎわう「西なぎさ」（2015年7月20日撮影）

なぎさ 生き物ミニ情報

水族園は「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、前3号分にわたる特集ページのため、しばらく報告できなかった地曳網の結果について、まとめてお伝えします。

2月地曳網調査：気温7℃、水温8℃と寒さの厳しい季節。風も強く、地曳網があらわれてしまうこともあり。採集生物はとて少なく、アシシロハゼなどが少数見られる程度でした。

4月地曳網調査：気温水温ともに18℃と暖かくなり、干潟はさまざまな生物でにぎわい始めました。網には小型のスズキやボラマハゼなどのハゼ類が大量に入りました。

6月地曳網調査：水温は27℃まで上昇。今年も例年通り、初夏に見られるクロダイの稚魚が採集されました。また、絶滅危惧種のチクゼンハゼも獲れました。

8月地曳網調査：気温水温ともに30℃を越え、夏真っ盛り。海水浴客が多くいるなかでの調査でした。地曳網には、東京湾では珍しいカライワシが入りました。